

# 中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第13827号 令和4年2月15日

## 2 月 号

ペンス米前副大統領発言の影響力……………	本紙編集部……………	1
世界統一戦略が多面的に動き始めた……………		2
人生100年時代の課題……………		3
<b>読者投稿</b> 皇位継承問題に一石を投じた内田樹氏……………		4
不都合な歴史事実から目を背けぬ姿勢を……………		5
本部・地方事務局活動報告……………		6

本 社 〒847-0871 佐賀県唐津市東大島町19-5  
電話 090-3199-8446 no.shin.7771008@gmail.com  
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)  
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

発 行 所  
**中央情報通信社**  
編集長/谷田 透

恐縮ですが3月の発行はお休み致します

# ペンス米前副大統領発言の影響力

本紙編集部

昨年十月に開かれた「第二回シンクタンク二〇二二フォーラム」に於いて、ペンス前副大統領が基調演説したが、現バイデン政権への失望や怨嗟をクリスチャンらしくオブラートに包んで語った。

その中で、四年間の副大統領時代に世界の大国を見てきたが、共通して「宗教の自由、言論の自由、民主主義、自由貿易体制の原則」を守っていたと強調した。つまり、その中の何か一つあるいは全部が守られていなければ大国ではないという意味である。要するに、中国は生まれ変わらなければ大国になれないということである。

バイデン政権に対しては「弱さが悪を引き起こす」と手厳しい発言をしている。そして、アフガニスタンからの惨めな撤退にもかかわらず、アメリカ国民はアジアや世界の同盟国を守ることに全力を尽くし、



「自由のチャンピオン、解放の守護者」であり続けると語っている。中国に対しては「秘密主義、謀略主義、統制主義、権威主義」がコロナパンデミックを引き起こして人類に計り知れない被害を与えたとして、世界の自由国家が立ち上がって中国に毅然とした態度で怒りを表明せよと語っている。

朝鮮半島問題の責任も中国にあり、台湾危機も責任は中国にあると語り、口先だけで外交交渉も出来ないバイデン政権を牽制しているが、日本と韓国に「同盟国として憂慮を共有せよ」と柔らかく釘を刺すことも忘れない。

今年十一月にはアメリカの中間選挙があるが、そこで民主党体制が大敗するこ

とは確実視され、それが今からバイデン政権の起死回生を狙った動きに結びつくことをペンスも恐れている。アメリカが主体となった戦争は、その端緒はいつも民主党の外交破綻から生まれているからだ。バイデンの外交破綻は、民主党系メディアでさえ批判するまでになった。

現在のアメリカ世論は、バイデンを「軟弱」と呼んで批判する共和党主流派の声を肯定している。つまり、トランプの「強硬」が「普通」に思えるまでにアメリカの体制が傾いてきたのだ。これは日本でも敏感に感じ取って、再び安倍晋三の言

説が力強さを増している。バイデンと仲良くしようと計画していた岸田首相の思惑は木っ端微塵に吹き飛んでいるのだ。フランスも大統領選挙を控えて、右派の言説が世論を味方につけ始めた。時代はバイデン政権を「失われた四年間」と総括する準備段階にあるようだ。

最もホワイトハウスの的だと言われたペンスの発言は、実は深く静かに流れるアメリカ人クリスチャンの思考を表明しているのが重要なのだ。中国共産党もペンス発言には注目しており、もうバイデン政権と交渉する意味は無いとさえ考えている。中間選挙が終わるまでに、バイデンが背水の陣で打ち出す作戦を肯定するか否定するかで、今後の世界情勢が影響を受けると習近平は認識している。

我々もペンス発言に注目する必要がある。残り二年の人気をレイムダックで過ごすバイデンを暴走させないよう見張る必要がある。

## 世界統一戦略が多面的に動き始めた

アメリカ大統領のトランプ登場が巻き起こした旋風は凄まじく、それまでの金融財閥や軍需産業コングロマリットたちの世界統一戦略も冷戦も、新時代へ一気に持って行った感がある。

ところが、居眠りジョーとか裏切りジョーとか呼ばれていたバイデンが大統領になり、アメリカが弱腰になったと見られ始めた途端に世界は動き始めた。弱肉強食の動物的本能が、アメリカが怖くて尻尾を丸めていた国々の指導者たちに蘇ったのだ。

金融と情報で世界統一を考える既存のグループに、軍需産業の力で世界統一を図るグループ、そして国家という枠組みを利用して世界統一を図るグループと手を組みたい独裁者たちが入り乱れ、パンドラの箱の蓋が開いたかのような状況になり始めている。

特に警戒が必要なのが、バイデン政権と習近平政権の野合である。アメリカと中国という枠組みと巨大な人口を利用したいグループと、人権を無視して様々な実験を繰り返したいグループはこの流れを歓迎している。表面上は政府間で敵対していれば、愚かで甘い世界の世論を騙すことができる。十年後に勝ち組になるのは誰だとは、世論もメディアも冷静な分析など行なわない。

アメリカのFRBが利上げして、世界中にばら撒いたドルを回収する経済政策を取るようになったが、これで外貨不足で泣くのは貧乏国と独裁国だけだ。その外貨不足分を、今度は中国が人民元を超低利でばら撒くことになっているそうだ。アメリカと中国だけが儲かる仕組みで、打ち合わせが無ければ出来ない荒技である。米中の対立



分野も対立機関も存在するが、親密な意見交換を繰り返しているところも存在している。EUの番長だったドイツのメルケルが引退したお陰で、EUは腰が弱くなっている。金融財閥の使用人だったフランスのマクロンもいなくなり、右翼の台頭を世論が歓迎する波乱含みも米中野合グループにとっては嬉しい展開である。

中国は北京オリンピックを利用して、通常なら不可能に近い人権無視のあらゆる実験を進めている。それが成功してデータが出来あがれば、次世代は中国が世界の安全保障をリードできると考えているらしい。金さえ払えばどんな注文にも応じてくれる

のは、IOCもデイズニーも同じである。中国は習近平と劉鶴の計画で経済が進み、その流れにチャイナ・ネオコンが追随する。国際為替部門を牛耳るウォール街が反対しても、アメリカや南米の半分の国が人民元を使い始めたら応じざるを得ない。その資金を回収する方法は、中国による公共事業の独占と必要以上の武器売買である。中国製の武器兵器が溢れてくれば、ネオコン復活である。

バイデンが急に避け始めたロシアのプーチンは、ウクライナの国内でマフィア勢力が大統領府に入り込んで「民間防衛隊」を捏造して武装許可を得ていることを危惧し、それを黙認しているバイデン大統領をロシアとEUを敵対させる目的を持ってしていると見ている。ウクライナは、多くのマフィア組織と右翼組織が群雄割拠の様相を呈し始めており、政府には取締まりも指導命令も出せない状況が続いている。本当なら、NATOが乗り込んでウクライナの治安維持をすることで、逆に、プーチンの口

シアが攻めてくる恐れがあると狼少年のように騒いでいる。

東欧と中央アジアの利権を独占したい思惑があるグループが、軍事的に強力なトルコ、インドを近寄らせないためにウクライナ危機を作っているのである。極東のウラジオストックではマフィア組織の上部組織はウクライナ人だと言われ、イスラエルから仕事を頼まれることもあるという。ウラジオのマフィアは、ロシア人の元警察や元軍人が多く戦闘力は強いそうで、極東で中国マフィアや韓国マフィアがいくら威張っても太刀打ちできないとのことである。

## 人生一〇〇年時代の課題

日本では一〇〇歳以上の人が三万人を越えている。その八八%は女性である。だが、その中で八〇%以上の人は認知症状が出ているという。つまり、ボケずに長生きできているのは僅か六千人ほどである。

「ボケずに長生きできたら人生は勝ったようなもの」と言うが、長生きに必要なものを高齢者にアンケートしてみると、大半は健康、金、友人という三つに集約されるといふ。

長生きしても社会の役に立たねば「無用の長物」と言われる。社会で定年退職してから、一年ごとの契約で延長雇用となつていく人も多い時代だが、高齢者の経験値は重要な社会資産であると認識している状況が少な過ぎるように思う。経験が多ければ「長い目で見ると」という思考が働く。若者はそれに反して「今が大事」と近視眼的に走る傾向が強い。経験を若者に伝えることで、若者は未経験の事象であっても「疑似体験」という思考で動ける基礎が出来上がる。経験しても分からない人は下等、経験して分かる人は中等、経験しなくても分



野合、談合、二重契約などが国家間でも当たり前になってきたトランプ以後の世界は、世界統一ルールを作ろうとするいくつかのグループの実験場となり草刈り場となるだろう。



世界は阿修羅のように顔も手足も数多い姿で、怒っているのか笑っているのかさえ判別できなくなってくる。そんな時代に突入しようだ。

かめる人は上等と言うのが昔からの言い回しだが、古事記の上巻に登場するクエビコという神様は、一歩も歩かずして世間の事を何でも知っていたという。これを最上と言うのである。

社会性を重要視する民族性が強い日本人は、経験値を若者に伝えて共有させることで社会の役に立つという事実を今までは大切にしてきた。しかし国際的価値観をもてはやす潮流の中では、その価値観さえ変化してきた。

アメリカ人のアンケート結果を見ると、「リタイア後が幸福だ」と答える人の割合が異常なほど多いことに驚くが、これはキリスト教的な考え方で「労働は神への奉仕であり、原罪に対する罰である」とする教育の結果であり、社会の為に働くという意味合いが薄いことを表わしている。だからこそ「労働の対価が多いほど、価値がある人間」という歪んだ価値観が正当化され、当たり前前の社会救済事業さえ「神に祝福されるボランティア」と威張るような風潮があるのだ。

仕事でもボランティアでも、何の為にそ

れをやっているかという目的意識が強ければ、価値観が満たされる。それが日本人の特徴的な考え方だ。だから、いい加減な働きを続けている精神的怠け者はアルツハイマーになりやすく進行も早い。京都府でハルツハイマーの独居男性（七五歳以上）を調査したところ、二週間以上誰とも話をしていない人が七〇%以上だったそうだ。社会から孤立する理由は、誰にも構われたくないということと、誰の役にも立たないからということが挙げられている。つまり、目的意識も経験の伝達も、そして人間関係

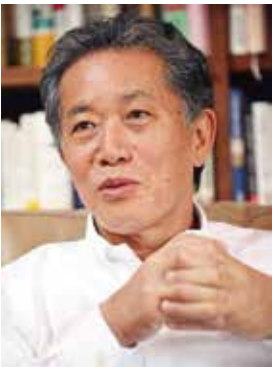
も「リタイア」しているのだ。人生は一〇〇年という時代に突入しているが、「良く生きる」ことを求めるためには何が必要なのか考えなければ、生物学的に長寿ではあるが社会福祉のお荷物になっていく、という悲劇的な高齢者の日々を過ごすなくてはならなくなる。「生きることは楽しいことが五〇%以上ある、苦しいことや悲しいことは四九%以下しかない」という長生きを考えて生きてゆきたいものである。

読者投稿

## 皇位継承問題に一石を投じた内田樹氏

神戸女学院名誉教授で思想家の内田樹氏（写真）が月刊日本二月号で「継承すべきは血統ではない、家風だ」という記事を入れている。当該号の「天皇危うし、存続の危機に立つ皇室」という特集において、「男系」「十一宮家復活」を主張する学者たちの中で唯一、明治政府原理主義者が激怒しそうな論調を展開している。

現在の保守系論者とみられている人の大半が、明治政府が強引に歴史的规则ルールを設定したものを金科玉条としている。まるで歴史は明治維新政府から始まる」と宣言しているに等しいが、本人たちは不思議と古事記を墨守しているつもりなのである。



これを支離滅裂と言えない言語空間が現代日本の保守系を支配しているのだが、そんな風潮の中で内田氏は勇氣ある発言を展開している。さらにそれを堂々と掲載する月刊日本も胆が坐っており敬意を表した

い。記事の中で内田氏は、象徴天皇というものは戦後七十年以上に亘る皇室の努力の賜物であると断じている。皇室と国民の関係

が最も危機的だった敗戦直後、それを打ち破ったものが「皇太子ご成婚」だったと見ている。これによって国民は皇室に「近い」という感覚を抱いて親近感を持った。それにより皇室は、あの安保騒動の時代でさえ政治的に中立で、常に「どちらかに与する」ことをせず、国民の平和と安寧を祈り続ける存在というイメージを確立した。

それは果たして「血統」が成せる業なのだろうか。戦後の皇室が必死で守り続けた「家風」を全員で維持されたからではないのか。それを確信させたのは、上皇陛下が二〇一六年に「お言葉」として発表されたものだったと言う。

天皇の第一義的なものは祖霊祭祀と国民の安寧と幸福を祈ること。そして象徴天皇の役割は死者に対する鎮魂と慰めであると上皇陛下は語られた。国民に寄り添って苦難を分かち合ってくれる存在が象徴天皇である。それは「男系男子」の血統だからという意味ではなく、そのような「家風」を守っているからなのではないか。「家風」の継承に男系とか女系とかは関係ないだろ

う。また国民の側でも「天皇は天照大御神の直系子孫だから、万世一系の皇統を継承しているから」ということを天皇尊崇の理由に挙げる人は少なくなっている。内田氏は断言する「共同体の物語は時代の要請に基づいて形成されるもの、その形成には歴史的必然性がある。しかし、ある特定の時代に採用された物語を超歴史的真理であるかのように語ることは出来ない」と。

「明治政府は神仏分離令で江戸時代の民間信仰を徹底的に解体して、新たに天皇と伊勢神宮を頂点とする国家神道を作り上げた。民衆の信仰心を土俗的で多様な神仏から回収して、霊的エネルギーを現人神に一点集中しようとした。いわば、天皇を『イエス』に、伊勢神宮を『バチカン』に擬した『日本型一神教』を技巧的に作り上げた」。これは明治政府が「一神教文化に対抗する霊的な物語を創造しないと列強に対抗できない」と考えたからだが、確かに政治的判断自体にはそれなりの合理性があったと内田氏は見ている。

最後に内田氏は「現在の天皇は国民の前にいる対話の相手であり、国民の横にいて共に歩む同伴者だと思っている。雲の上にいる訳ではない。国民の仕事は何よりも象徴天皇制が適切に機能し、皇族の方たちが出来るだけ自由かつ愉快に生きられるよう支援することだと思おう」と、

## 不都合な歴史事実から目を背けぬ姿勢を

我々はともすれば自己肯定と自己弁護のために、不都合から目を背けて「無かったこと」と考える兆候がある。酷い場合は、事実を語れば「敵」「嘘つき」と憎悪を剥き出す場合もある。これが正しいわけはない。

第十九回開高健ノンフィクション賞を受

私たちに問題提起している。天皇原理主義者を自認する人たちの言動が、果たして皇族の方たちに喜ばれているのか、象徴天皇制に役立つ機能があるのかという問いかけを、内田氏は堂々と月刊日本で示している。

歴代の天皇の全てが大嘗祭を行なわれた訳ではなく、その意味では祖霊と同衾・同食という霊的儀式を行なわれていない方がおられるのは事実だろう。そうすると、霊的同一性を最も重要だと考える場合に「半帝」となり、それは天皇として認められないことになる。或る大学教授が言い出した「男系遺伝子」というキリスト教が喜びそうな「天皇制解体論」を、保守系論者がもてはやした異様さがクローズアップされるべきだろう。

男系男子という天皇のルールは、神武天皇から決まっているのかどうか。それとも神武天皇以前の神々の誰かが決められたことなのか。たまたま、天皇は男系男子ということなのか。恐らく明治政府は力技で反論や議論を抑え込んだのだろうが、現代の我々が明治政府の「国定教科書」を唯一絶対としなければならぬとは思わない。

くれぐれも天皇陛下や皇族を困らせるような国民であってはならない。内田樹氏の勇気は、日本世論のために重要であると思う。

けた平井美帆の「ソ連兵へ差し出された娘たち」という本が売れている。著者が、岐阜県黒川村から満洲開拓団として送り込まれた人たちの生き残りに取材したノンフィクションだが、そこには思い出したくなかった事実を墓場まで持って行けずに泣きながら話す老人たちの姿が描かれている。

満洲事変の後、国策として全国の貧しい農家や貧困部落を満洲に移民させ、開拓団と称して開墾事業に従事させた。ところが昭和二十年八月、日ソ中立条約を一方的に破って参戦したソ連軍は、刑務所から懲役に軍服を着せて満洲に送り込み、日本人開拓団を根絶やしにする為に暴虐の限りをさせた。

彼らはソ連囚人部隊と呼べられられた。日本人から略奪することも自由で、それを彼らは「ラーチ」（拉致の原語と呼んで競い合ったそう。略奪、殺人、放火、強姦などやりたい放題で、ソ連正規軍は戦争が終わればそれら囚人部隊は全員処刑する予定だったので、とにかく日本人を満洲から消し去るといった目的意識だけで動いていたことになる。

岐阜県黒川村からの移民は六〇〇人で、そこにはソ連囚人部隊だけでなく満洲人も襲撃して来たそう。すると移民村の幹部たちはソ連囚人部隊と取引し、若い娘を十五人差し出すから村を守ってほしいと懇願したそう。まるで黒澤明の「七人の侍」みたいな話だが、毒を以て毒を制すと考えた末のことだったかもしれない。そして、選抜された黒川村の十五人の少女はソ連兵に慰安婦として差し出され、その中の当時十七歳だった女性が生存者として証言しているのだ。著者は慰安婦にされた少女の生き残り三人を訪問し、誰にも言えなかった当時の地獄の日々を聞き出している。

移民村の幹部（開拓団幹部）たちは、集団の利益の為に犠牲は必要だと自己弁護しているが、ソ連囚人部隊に慰安婦の少女を差し出して「接待」と呼ばせるような話には許されるものではない。差し出される少女たちもその親たちも、自分たち以外の村人の「人柱」にされて捨てられたのだ。そ



れを、集団を守るために被害は少なくしなければならぬと主張するなら、集団そのものが論理破綻している。そんな集団は単なる「群れ」でしかない。

著者が強調するのは「弱くてずるい人間が、戦争になって取る行動は日常の地続きである。既に存在していることが非常時に顕在化するだけなのだ」ということである。

不都合な事実から目を背け、日本の戦争の歴史には一点の曇りも傷もないと声高に主張する人を散見するが、それは自己肯定と自己弁護に汲々とするあまり、事実に対して目を閉じているのだ。何が良くて何が悪いのかを語ることが出来なければ、自縄自縛の果てに論理破綻して滅びることになる。国史を誇ればこそ、良いことと悪いことを比較判断しなければ、歴史は語れないのである。

## 本部、地方事務局活動報告

### ■関東・東北事務局

◇一月八日（火）

・前日七日に青年思想研究会事務総長・吉田寛治氏が七十八歳にて逝去され、この日午後一時、東京都台東区入谷「正覚寺」へ、本党顧問・杉山清一が弔問。

◇一月二十三日（日）

・渋谷区神宮前の神宮通公園にて、午前十一時半から「北京五輪反対大行進」が実行され、隊列責任者として本党・内藤幹事長、および山田幹事が参加。

### ■関西事務局

◇一月十四日（金）

・午後六時より、尼崎市内において「むすびの集い」勉強会。党員、有志計四名参加。テーマは「もうすぐ人類が滅びる説」。資料は「当事者が語るハリウッド『中国推し』の舞台裏」ほか。